

はじめに

中国は、一九七六年の毛沢東の死去を境に、毛沢東時代から、短い華国鋒の下での過渡期を経て、鄧小平時代に入った。

それ以降、一六年に及ぶ鄧小平時代に中国は大きく変化した。この変化はさらに二十一世紀前半において、中国を世界の発展センターとして世界経済をリードする存在にし、アジアの中で、世界の中の超大国として興隆させようとしている。

このような状況の中で、日本はアジアにおいて、世界においてどのような役割を果たすのか。二十一世紀前半の日本と中国の関係のあり方はどうあるべきなのか、が大きく問われているといえる。

そして、中国は現在、鄧小平の時代が終焉し、ポスト鄧小平の時代に転換しつつある。新しい危機と機会が混在したアジアの時代が到来しつつあるといえる。

したがって、中国は鄧小平時代にどう変化し、これからどこへ向かおうとしているのかを問うことは、中国の人々ばかりでなく、アジアの人々の切実な関心事となっている。

本書では、こうした問題意識から、この時点に立って、鄧小平時代の中国の政治経済における政策的变化を一つの流れとして整理するように努力を行なった。

本書の叙述の特色は次の点にある。鄧小平体制が経済の近代化を戦略的重点として位置づけ、政策展開を行ってきたことに依拠して、経済面での発展と構造変化を確認すると同時に、改革・開放政策の展開がこれにどのような関わりを持ったかを叙述し、その政策展開過程の中で鄧小平の戦略的選択を考えるように努めた。

こうした流れの中で、鄧小平の役割もかなり明確になるであろう。しかし、資料と情報の制約が大きく、本書では政策と争点の変化を中心として叙述するにとどまるほかなく、政策決定プロセス等深部の説明は、ごく一部を除いて今後の課題として残さざるを得ない。